

妊娠中の様態から考えてつわりなどで口腔衛生状態の悪い患者がなりやすいように思われますが。

そして又、不良歯冠修復物などの部位に発生しやすいようですが、いずれこれら口腔衛生の管理や不良修復物の除去が外科的に切除しなくとも良い例がでて来るものと思われませんが。

回 答：福田 容子（予診）

今回の検索においても、産後に切除されたものが6例ありました。

また文献的にも妊娠中より産後に切除する方が望ましいと報告されています。

質 問：坂 卷 公 男（歯放）

今回、15例中、上顎前歯部6例、下顎臼歯部5例でしたが、好発する部位との組織学的関連がありますか。

回 答：福田 容子（予診）

一般にエプリースは上顎前歯部に多いと言われていますが、今回の検索では上顎前歯部6例、下顎臼歯部5例と、下顎にも同じくらいみられました。また、上顎と下顎のエプリースの組織像に差はみられませんでした。

また、エプリース形成の原因については、組織学的に見て肉芽組織から血管成分が増成し、瘻痕化に至る経過をたどっているため、炎症が原因と思われました。

質 問：野 坂 洋 一 郎（口解1）

間葉系線維組織増殖過程における線維化の段階の血管と線維の比率において、血管の減少が遅延している像と思われるが、その原因は何か。

回 答：福田 容子（予診）

妊娠性エプリースで血管が残存あるいは増殖する原因については、不明です。

演題13. フェリチン抗体法及びフェリチン標識レクチンによる口唇表皮基底膜の非コラーゲン構成成分の検出

○大 沢 得 二

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

基底膜の構成成分としてはⅣ型コラーゲン、そしてラミニン、ファイブロンネクチンなどの糖タンパクが知られている。基底膜は、表皮下、シュワン細胞周囲、血管内皮細胞の周囲などに見られるが、それぞれ形態

的にはわずかず異なっている。特に表皮下の基底膜は他の基底膜より厚く、表皮の基底層の細胞が半切着斑を作って切着し、又、基底膜と結合組織との間にはアンカーリング、ファイブリンが介在するなどの特徴があり、均一的なものとは考えられない。そこで上記の基底膜構成成分がどの様に分布しているかは興味ある問題である今回は凍結融解処理により表皮を脱落させる事により基底膜の細胞側を露出させ、組織化学的検索を行なった。

材料としては ddY 系雄マウスの下唇を用いた。液体窒素で冷やしたピンセットでくり返しつまむ事により、下唇を10回凍結融解した。表皮細胞が基底膜よりはがれる、処理後2～3日に下唇を切り出し、50 μ の厚さの凍結切片を作製した。それらの切片を用いて組織化学を行ない、次に固定包埋して電顕的に観察した。すなわちフェリチン抗体法間接法でラミニンの、又、直接法でファイブロンネクチンの存在を検索し、さらにフェリチン標識した12種のラミニン(UEA-I, PNA, GS-I, MPA, PCA-1, DBA, SBA, Con A, GS-II, WGA, BPA, LFA)を用いて種々の糖残基の検出を試みた。

その結果、ラミニンは基底膜の細胞側と共に内部にも観察された。ファイブロンネクチンは今回検出されなかったが、基底膜の細胞側には量的に少ないものと考えられる。レクチンについては、RCA-I, Con A, WGAの三種が陽性に反応し、 β -D-galactose, α -D-mannose, α -D-glucose, (β (1-4)-N-acetyl-D-glucosamine)2の存在を示唆した。

演題14. ウサギを用いた顎・顔面痛の研究（尿酸塩顎関節内注入による）

○奥 田 和 久, 平 孝 清, 佐 藤 匡,
鈴 木 隆

岩手医科大学歯学部口腔生理学講座

（緒言）顎関節を含む頭部・顔面領域に持続痛を実験的に惹起する方法および定量的な測定法の確立が困難であるために、同領域の疼痛や機能異常に関する生理学的アプローチを試みた実験は少ない。そこで今回、結晶誘発性関節炎をウサギの顎関節に惹起させたところ、同部を含む顎・顔面領域に数日にわたる圧痛閾値低下が観測されたので、実験方法および定量化された成績について報告する。